
国立 国会 図書館 月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2017.6



古地図で歩く江戸時代の永田町
NDC10版がやってきた！
世界図書館紀行 北米・欧州図書館巡行記 欧州編

国立 国会 図書館 月報

NO. 674
JUNE 2017

CONTENTS

- 1 霧の画家
牧野義雄が愛したロンドン
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 4 古地図で歩く江戸時代の永田町
- 10 資料の世界の歩き方 中世の古文書を読んでみよう②
鎌倉将軍は「君臨すれども統治せず」？
- 13 NDCの誕生
- 16 What's 書誌調整ふたたび 第9回
NDC 10版がやってきた！
- 19 世界図書館紀行
北米・欧州図書館巡行記 欧州編
- 18 館内スコープ
めくり続けて真つ黒になるまで
- 27 本屋にない本
ワイン展 ぶどうから生まれた奇跡
- 28 NDL Topics



表紙：
牧野義雄 画「NIGHT: LIGHTS IN PICCADILLY CIRCUS」
The colour of London より（「今月の一冊」参照）

霧の画家

牧野義雄が愛したロンドン

えんどう あきこ
遠藤 暁子

The colour of London

historic, personal, & local,
by W. J. Loftie, F. S. A.
Illustrated by Yoshio Markino.
With an introduction by M. H.
Spielmann, F. S. A. and
an essay by the artist.
London : Chatto & Windus,
1907. xlij, 236 p. illus., 60
plates (48 col) 24 cm
<請求記号 177-101>



THE EVENING EXODUS—WEST END. ENTERING VICTORIA RAILWAY STATION

The colour of London は、1907(明治40)年に出版された、ロンドンの歴史や文化、建築、生活様式を紹介する本です。歴史家のW. J. ロフティが本文を担当し、美術評論家M. H. スピールマンが序文を寄せています。挿絵を担当し、また、ユニークな視点でロンドンを賛美するエッセイも執筆しているのが、画家で文筆家の牧野義雄です。牧野の描くロンドンの情景は、ごく薄いシルクのベールに包まれたような優しい光沢があり、構図や色彩にはどこことなく日本画の趣が感じられます。

牧野は、1869(明治2)年に挙母村(現・愛知県豊田市)の武士の家に生まれました。1893(明治26)年、23歳のときに英文学の研究を志して渡米しましたが、周囲から美術を専攻することを薦められ、働きながら美術学校に通いました。当時、米国西海岸では移民への排斥運動が激化しており、牧野も理不尽な差別に苦しみました。牧野も理不尽な差別に苦しみました。持ち前の天真爛漫な性格で学友に恵まれ、絵画の制作に

一心に取り組みました。その後、パリを経由して1897(明治30)年に英国に渡りました。到着したときの彼の所持品は、40フランと聖書と仏教の哲学書とわずかな衣類のみで、絵の道具すら持っていないませんでした。渡英後も経済的に困難な日々が続きますが、画業で身を立てるべく絵を出版社に持ち込むなど精力的に活動する牧野に巡ってきたチャンスが、大手出版社Chatto & Windus社の*The colour of London*の出版企画でした。

本書は、クロス張りの豪華本で、挿絵はカラーが48枚、セピアが12枚あり、オフセット印刷によって牧野の繊細な水彩画の持ち味が再現されています。ロンドンの人々にとって忌々しい「霧」というよりもスモッグに包まれた街を、叙情的に美しく描いた作品は新鮮に受けとめられ、刊行後に開催された原画展には著名人が多数来場し好評を博しました。また、本書の特製版が英国王エドワード7世に献上され、バッキンガム宮殿の



A JUNE SUNDAY : CHURCH PARADE IN HYDE PARK

The colour of London の挿絵の中で、最初の頃に完成した作品で、教会から礼拝を終えた盛装の人々が行列のように続く様子を描いています。



牧野の肖像写真

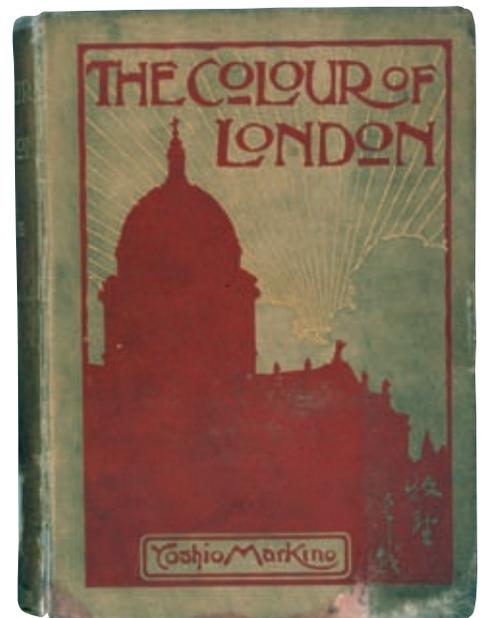
When I was a child < 請求記号 199-103 > より



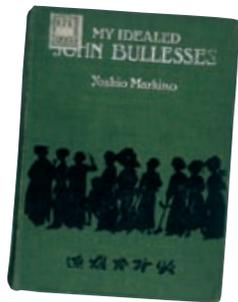
OPENING DAY AT EARL'S COURT

A Japanese artist in London < 請求記号 161-273 (洋) > より

出版社に絵を持ち込んでいた頃のスケッチです。水墨画を思わせる筆遣いで、画面右上には、「すやり霞」のような部分も見られます。



装丁も牧野が担当しています。牧野の名は、「メイキノ」と誤読されないように「Markino」と綴られています。



(左) IN LONDON FOG (右上) Votes for women
My idealead John Bullesses <請求記号 174-293 (洋)> より

The colour of Londonのエッセイで自分は英国女性の崇拜者であると明言しているように、牧野はインスピレーションの源である女性像を数多く描いています。My idealead John Bullessesはそんな愛すべき英国人女性に関する著作です。クリスタベル・バンクハーストをはじめとする婦人参政権運動家とも交流があった牧野はMy idealead John Bullessesで、英国における男尊女卑をユーモアを交えて批判しています。

王室図書館に収蔵されました。折からのジャポニスム・ブームや、1902(明治35)年の日英同盟締結など、新興国である日本に対する関心の高まりが追い風となり、牧野は一躍脚光を浴びます。人々の心を捉えたのは絵画だけでなく、平明なジャパニーズ・イングリッシュながら機知に富んだ文章の力でもありました。本書以降には著書も多く出版し、自身の代表作となった滞英記『A Japanese artist in London』は、英国のみならず米国でも大きな反響を呼びました。成功を収めた牧野は、社交界にも出入りするようになりますが、典型的な階級社会の英国において、多くの人に受け入れられたのは、彼の人柄によるところが大きかったようです。

後半生は、東西思想の比較研究に没頭するようになり、少しずつ世間から忘れられた存在となってきました。第二次世界大戦の開戦後は、懇意にしていた重光葵のはからいで駐英日本大使館に身を寄せていましたが、1942(昭

和17)年に帰国し、1956(昭和31)年10月に鎌倉の入院先で没しています。同年に暮しの手帖社から米国時代の回想録『あさきゆめみし』が刊行された他は資料も乏しく、絵画制作や文筆活動の全容は不明な点が多く明らかではありません。

再びロンドンに戻ることを熱望していた牧野ですが、残念ながらその願いは叶いませんでした。しかし、彼が愛し続けた「霧のロンドン」は、今も色あせることなく、著作の中で柔らかな光を放ち続けています。

参考文献：ますこひろしげ 著『日本人画工牧野義雄 = Yoshio Makino: 平治ロンドン日記』東信堂 2013。<請求記号 KC229-L13>
牧野義雄 [画]; 豊田市美術館 編『牧野義雄』豊田市美術館 2008。<請求記号 KC16-J399>
牧野義雄 原著; 恒松郁生 訳『霧のロンドン: 日本人画家滞英記』雄山閣 2007。<請求記号 KC229-H218>
イアン・ニッシュ 編; 日英文化交流研究会 訳『英国と日本: 日英交流人物列伝』博文館新社 2002。<請求記号 A99-GZ-G3>
ヨシオ・マルキーノ 著; 恒松郁生 訳『私のロンドン・パリ・ローマ印象記』ロンドン漱石記念館 1990。<請求記号 GG176-E58>
牧野義雄 著; 恒松郁生 訳『わが理想の英国女性たち』豊田市教育委員会 1990。<請求記号 EF73-E70>

古地図で歩く

江戸時代の

永田町

林 瞬介
はやし しゆんすけ



地図① 永田町之絵図 (宝暦9 (1759)年)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542345/2>

ここ数年、古地図ブームのようなものが起きているようです。

書店の棚には古地図を復刻した書籍が並び、テレビをつければ古地図を頼りに街を歩く番組を見かけます。インターネット上でも、無料で古地図を閲覧できるウェブサイトがいくつか見られるようになりました。

国立国会図書館デジタルコレクションも、当館が所蔵する江戸時代から昭和初期にかけて出版された古地図の数々を公開しています。

今日はこれらの古地図を眺めながら、東京・永田町の国立国会図書館東京本館周辺を歩いてみましょう。

江戸時代中頃と、幕末の地図を並べてみました。現在、東京本館の利用者人口のあたりには、地図①では旗本・勝田豊三郎かつたとよさぶろう（七代將軍徳川家継の母月光院の実家）、地図②では外様大名・細川山城守ほそかわまさしろのかみ（肥後国（現在の熊本県）宇土藩主）の屋敷が建っていました。少し詳しく見てみましょう。



地図②より
四角く囲った範囲がおよそ国会議事堂の敷地に、▲の印が国立国会図書館の利用者入口付近に相当すると考えられます。
なお、この地図は左ページの地図と比較すると、道路や屋敷の方位が大胆にデフォルメされています。これは、ふところに入れて持ち歩くと、ある範囲の街並みを決められた紙の大きさに収めるための工夫でした。こうした地図を「切絵図」といいます。

江戸時代の永田町

江戸時代の永田町境界は大名・旗本のお屋敷が立ち並ぶ武家屋敷街でした。永田町という地名は、幕末には大村丹後守（肥前国（現在の長崎県）大村藩主）の屋敷になっていたあたりの通りが「永田丁」、そこから丁字路に分かれて旗本・永田伊織の屋敷の前の向かっての通りが「永田馬場」と呼ばれていたことに由来します。

永田伊織の屋敷は現在国会議事堂の建っている敷地の裏手にあたりますが、江戸時代の中頃には永田姓の旗本の屋敷が二軒並んでおり、そこから永田馬場という名前がついたと言われています（左ページ図参照）。



かつて永田馬場と呼ばれ、「永田町」の名称の由来となった通り。左が国会議事堂（の裏手）、右の建物は議員会館。

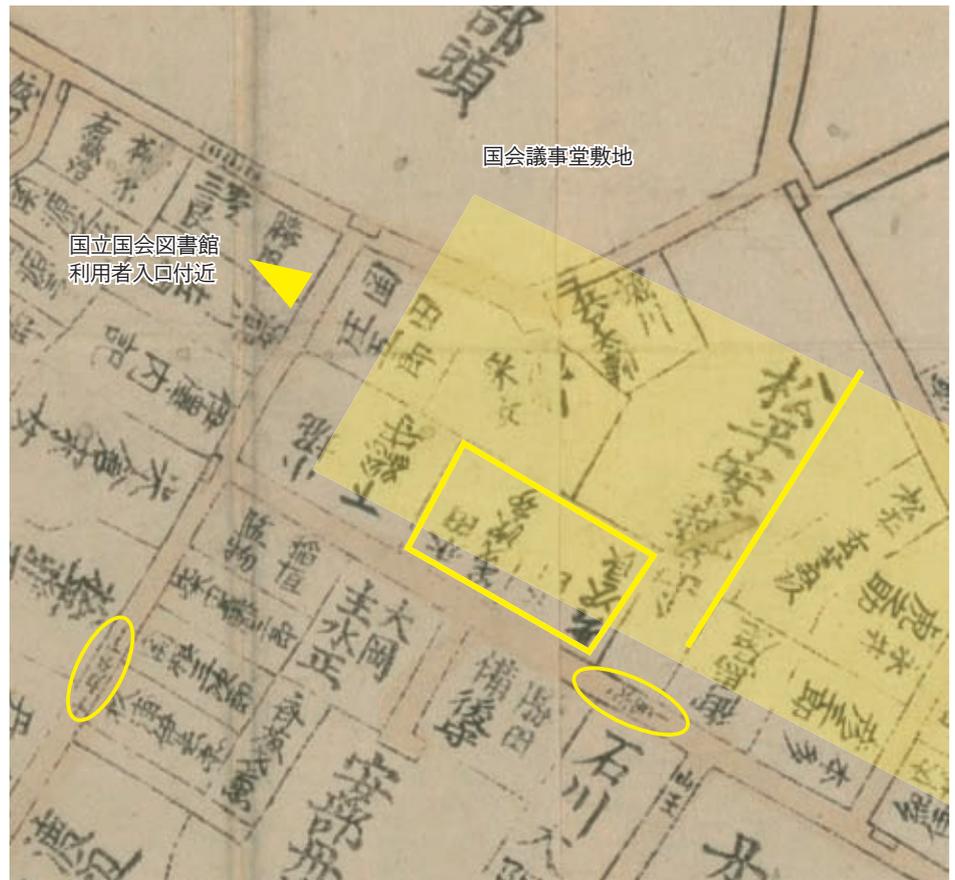
かつて永田馬場と呼ばれていた通りは、おおよそ現在も国会議事堂裏の国道として跡をとどめています。

永田町の地形

国会議事堂の建っている場所は、江戸時代には松平安芸守、つまり安芸国（現在の広島県）を支配する大名である広島藩主・浅野家の広大な中屋敷になっていました。この屋敷には緑豊かな庭園と池が築かれており、江戸時代の名所案内によれば、玉川上水の流れを引き入れてつくられた「白糸滝」という名勝で知られていたようです（『江戸砂子温故名蹟誌』）。



国立国会図書館東京本館南側。右手の道路は3階の高さにあたり、1階の高さまで地面が掘り込まれて、陸橋が渡されています。



地図①より
文字がかすれていますが、黄色い枠内に永田姓の旗本の家が2軒並んで記されています。



(地理院地図より。標準地図に色別標高図、陰影起伏図を合成したもの)

国会議事堂の場所に滝！ にわかには想像もできませんが、当時この中屋敷のあたりが傾斜した地形になっていたのは確かです。永田町は新宿から皇居にかけて伸びている淀橋台もちばたという台地の先端に位置している、武家屋敷が開かれるまでは地続きの北西を除いて三方が崖に囲まれた半島状の小高い丘でした。

現在、東京本館を利用される多くの方は東京メトロ有楽町線永田町駅の2番出口を利用されます。この出口から地上に出ると東京本館は左前方ですが、地面は建物の三階の高さにあります。そこから二階の利用者入口へは階段を降りていくことになります。実は、東京本館の建っている場所は急な斜面になっていました。戦後、東京本館の建築に当たって坂下の低い側に地盤を揃えて整地したのです。

地面を掘り込んだ痕跡は、東京本館南側の高い擁壁からもわかります(左上写真)。

彦根城主井伊家の屋敷跡

江戸時代の中頃から幕末まで、永田町界隈の中でもっとも大きな存在感を放っていた武家屋敷は、なんともいっても譜代大名筆頭として近江国（現在の滋賀県）彦根藩三十万石を治める井伊家の上屋敷でしょう。絵図では特徴的な不揃いの五角形で、とてもよく目につきます。

井伊家の表門は江戸城に向けて、当時皂角の木が多く見られたことから「サイカチ河岸」と呼ばれていた内堀通りに沿って開いていました。幕末の大老・井伊掃部頭直弼はここからお城に向かう途中、桜田門の外で暗殺されたのです。

明治維新後、井伊家の広大な屋敷は陸軍の用地になり、当初は陸軍幼年学校などの教育機関が、のちには陸軍省や参謀本部といった陸軍の中樞が置かれました。戦後には国会の用地へと転じ、現在は憲政記念館が

建つ国会前庭になっています。

東京本館建築以前、旧赤坂離宮に入居していた当館の仮分庁舎だった国立国会図書館三宅坂分室も、この井伊家屋敷跡におかれていました。

梨木坂（なしのきざか）

明治から昭和の中頃まで、井伊家の敷地は五角形の原形をとどめていましたが、戦後の国会周辺の整備の過程で道路が大きく引き直され、この界隈の景観もすっかり様変わりしてしまいました。現在では大名屋敷の痕跡をほとんど感じることはありません。

そんな中で、地図をよく見比べると、井伊家と細川家の屋敷の間の道がわずかに残っていることがわかります。この場所には細川家の表門と向かい合って井伊家の裏門があり、そこから下り坂になっていました。裏門のそばに大きな梨の木が立っていたことから、この坂道のことを



昭和 24 (1949) 年から昭和 37 (1962) 年まで国立国会図書館の仮庁舎だった三宅坂分室。



憲政記念館



地図②より 図中右上部分にあるのが桜田門（桜田御門）。（北が上になるように角度を補正しています）



東京本館の利用者入口側（東側）。



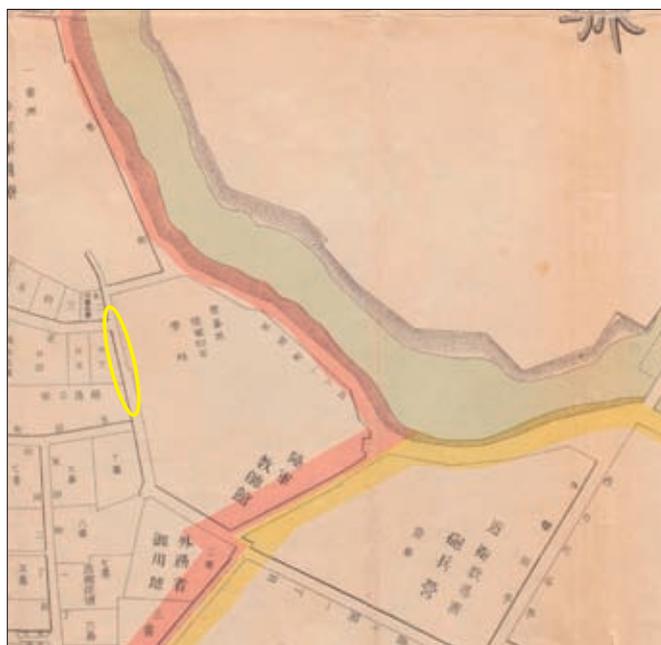
梨木坂。右側が国立国会図書館東京本館。

「梨木坂」と呼んでいたそうです。
 この坂は現在、東京本館と国会
 参観バス駐車場の間の道にあたり、
 ちょうど東京本館の利用者入口あた
 りに千代田区教育委員会の建てた案
 内柱があります。

この短い坂道を東京本館にお越し
 の方が日々たくさん通り過ぎて行か
 れますが、時には足を止めてかつて
 の広大な井伊家屋敷を想像してみ
 はいかがでしょう。



現代の地図。五角形の敷地の名残は少ないのですが、丸印の部分が梨の木坂。
 (地理院地図より)

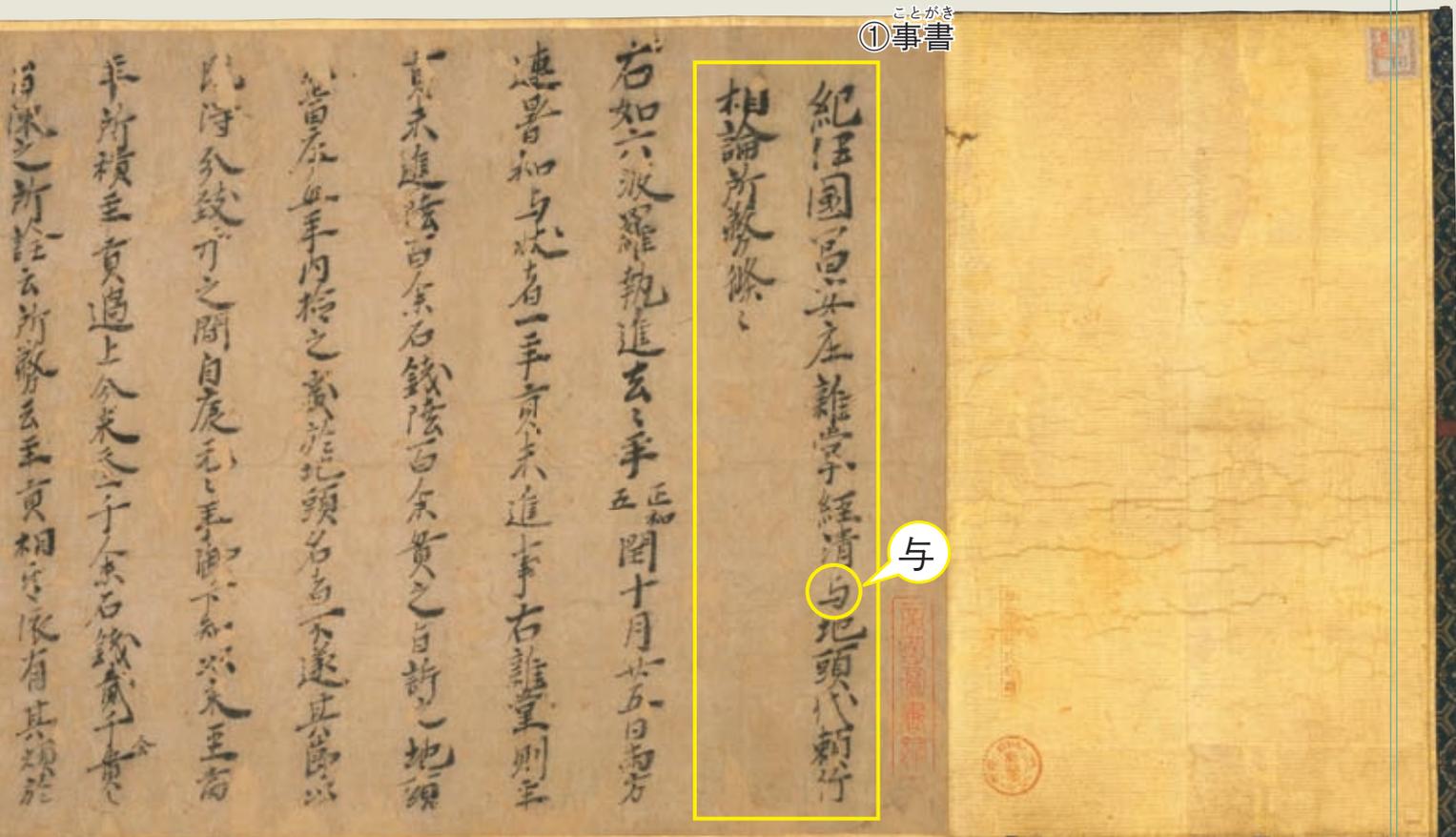


明治東京全図（明治9（1876）年）
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3450840/38>
 井伊家の屋敷は陸軍の用地となりましたが、特徴的な五角形の敷地が残っています。



鎌倉将軍は「君臨すれども統治せず」？

木下 竜馬



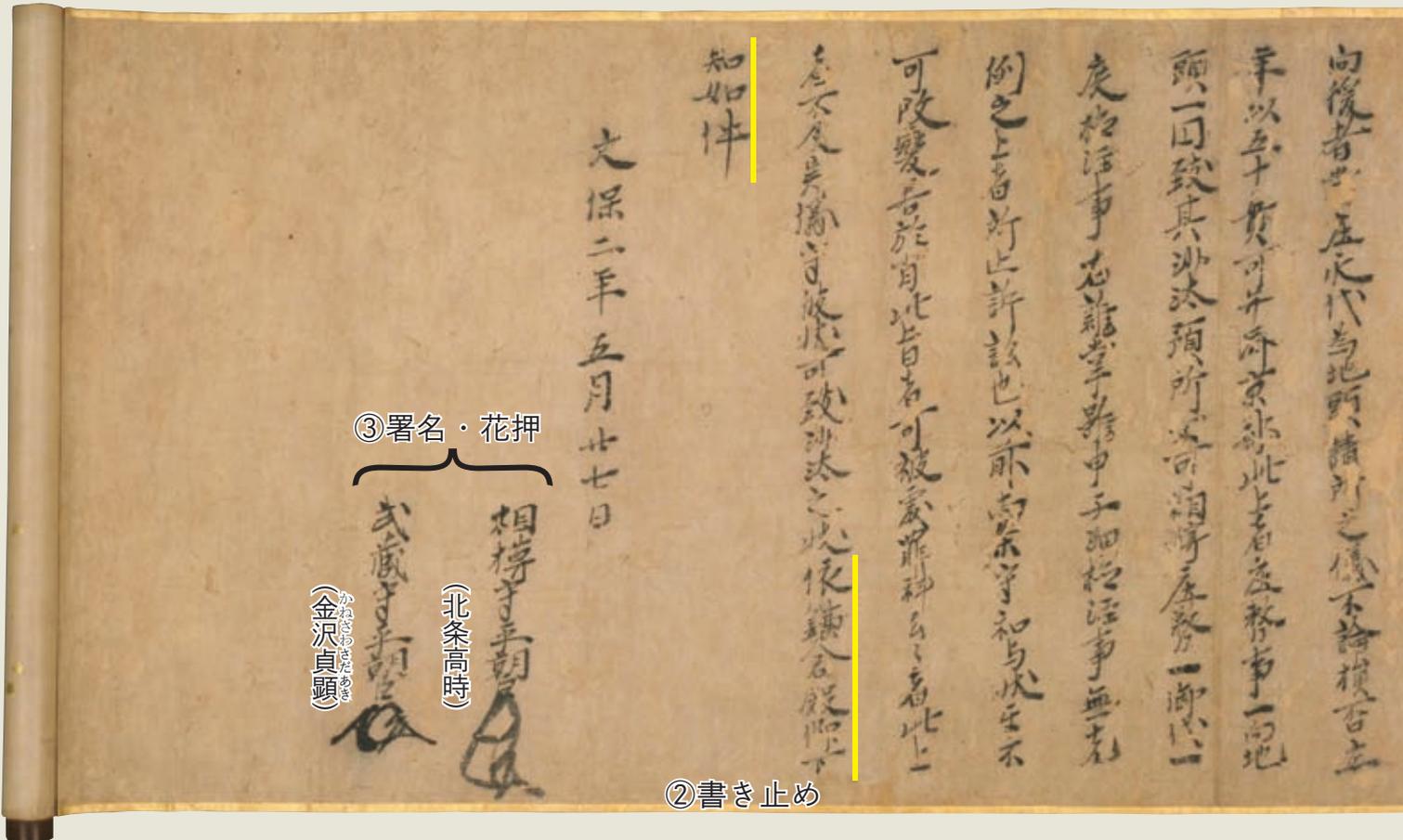
今回とりあげる古文書（以下、本文書）は、鎌倉幕府が文保二年（一二二八）五月二七日に出した、関東下知状という様式の文書です（「関東」とは鎌倉幕府のこと）。

とても長い文書で意味をとるのはなかなか骨が折れそうですが、実は内容を要約したヘッドラインがあります。それが、冒頭の一字下げの部分である「ことがき事書」です（①）。本文書の事書を見ると「A 与 B 相論〇〇」という構造になっています。「与」は「と」と読み「&アンド」の意味です。「相論」とは訴訟沙汰のことです。この事書の構造は、AとBという原告・被告が争う〇〇についての紛争に、鎌倉幕府が裁判所として判決を与えたことを示しています。つまり本文書は、判決書なのです。判決のことを中世では「裁許」といったので、本文書は関東裁許状とも呼ばれます。判決本文は複雑なので、今回は本文書の様式を中心に読み解くことにしましょう。本文書は下知状という鎌倉幕府でよく用いられた様式です。この下知状の様式に、鎌倉幕府の政治形態が反映されているのです。

「資料の世界の歩き方」は、国立国会図書館（NDL）の所蔵する資料のうち、少し難しそうな資料を取り上げて、その「よみかた」をまなぶ連載です。



文保2年（1318）5月27日付関東下知状
 (国立国会図書館所蔵「鎌倉殿下知状」)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288412/4>



③署名・花押

相模守平朝臣
 (北条高時)
 武蔵守平朝臣
 (金沢貞顕)

②書き止め

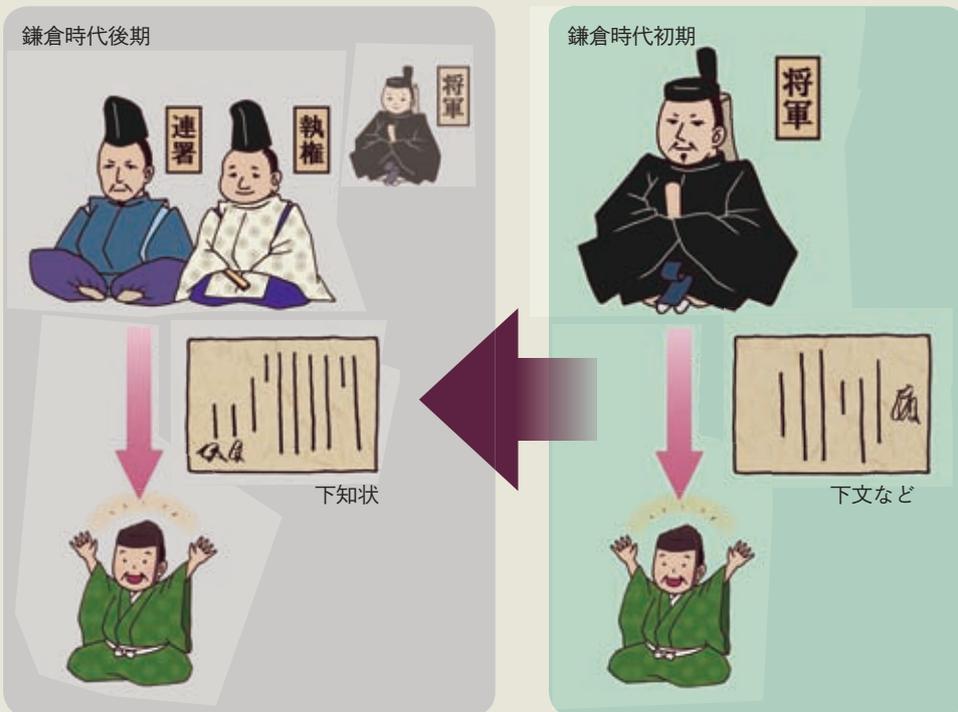
本文書の末尾の署名に花押を書いているのは二人(③)。ひとりには執権の北条高時(「相模守平朝臣」)、もうひとりが連署(執権の補佐)の金沢貞顕(「武蔵守平朝臣」)です。次に、書き止め(②)を見てみましょう。読み下すと「鎌倉殿の仰せに依つて、下知件の如し」、現代語訳すると、「鎌倉殿のご意向によって、命じるところは以上である。」となります。鎌倉殿とは、北条高時のことではなく、鎌倉幕府のシンボルである征夷大将軍を指しています。つまり、本文書は、將軍の意向を受けているかのように書かれています。ですが、おそらく將軍自身は、この裁判について何か聞かされることはなかったでしょう。執権と連署のみが署判しているのは、この案件については彼らが最終的な判断を行っており、その責任を負う存在だったことを反映しているのです。

鎌倉幕府を開いた初代將軍の源頼朝は、みずから裁判を行うような強力な指導者であり、自分の花押を直に書いた文書(下文など)を与えていました。しかし、代を追うごとに鎌倉幕府の將軍は実権を失っていき、単なるお飾り

Column

執権・北条高時と連署・金沢貞顕

本文書が作成されたとき、高時は当時 16 歳。鎌倉北条氏の最後の当主である彼は、14 歳で幕府政治のトップである執権職に就きました。一方貞顕は北条氏の一族金沢氏の出身で当時 41 歳。祖父の築いた金沢文庫を大きく発展させた人物です。のち、反鎌倉幕府の兵をあげた新田義貞らの兵に囲まれ、高時や貞顕をはじめとした北条一族は自刃し鎌倉幕府は滅亡することになります。なお本文書作成時の将軍は、最後の将軍である守邦親王。鎌倉中期から、皇族が鎌倉に下って将軍になる慣例ができました。幕府滅亡後の守邦親王については、数か月後に死亡したこと以外よくわかっていません。



(絵・正保五月)

図：
将軍が直に出す文書から、
執権・連署の下知状へ

政治のありかたの変化と、
文書の様式が対応
しているんだね！



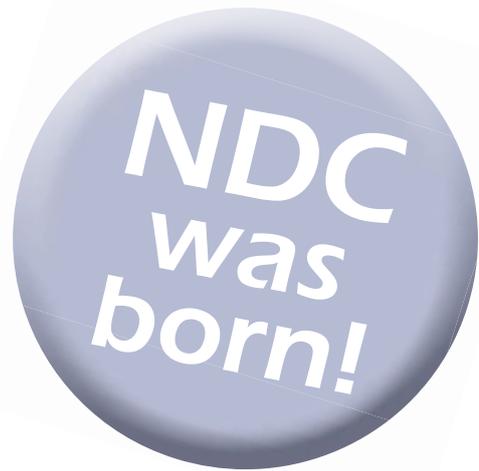
今回は、本文書の内容、つまり判決本文の構造を読み解いていきたいと思います。



◆ ◆ ◆
ちなみに、鎌倉幕府が滅び、南北朝の内乱のなかで室町幕府ができるまで、戦時のため将軍のリーダーシップが重要になり、源頼朝のころのような、将軍が直に花押を書いて出す文書が復活することになります。前回とりあげた足利義満の御判御教書もそのひとつです。

◆ ◆ ◆
になってしまいます。それに代わって、幕府政治の実権を握っていくのが、有力御家人だった北条氏です。北条氏は将軍の補佐役である執権を世襲し、一族で幕府の要職を固めました。こうして、将軍は「君臨すれども統治せず」という体制ができあがったのです。将軍の意思というタテマエで執権・連署が出す下知状は、お飾りの将軍を担ぎながら北条氏が政務を行う幕府の政治形態にマッチした文書様式だったため、鎌倉幕府でよく使われる文書様式になったのでした(図参照)。

000	總 記	General works
100	精神科學	Spiritual sciences
200	歴史科學	Historical sciences
300	社會科學	Social sciences
400	自然科學	Natural science
500	工 藝 學	Technology
600	産 業 學	Industrial arts
700	美 術 學	Fine arts
800	語 學	Language
900	文 學	Literature



日本の図書館の大半で共通に採用され、今や日本の「標準分類法」としてゆるぎない地位を築いている NDC。それはどのようにして生まれたのでしょうか。NDC の誕生を振り返ります。

NDCの誕生

NDC前史

まずは NDC の成立の背景を考えるために、明治時代に遡って日本の図書館分類法を見てみましょう。明治以降、NDC が標準分類法として認められるまで、名実ともに標準分類法と呼べる分類法は日本に存在しませんでした。そのため当時の図書館は、規模や種類に応じて分類法を自ら作成する必要がありました。

八門分類

分類法を作成するにあたって各図書館がまず参考にしたのが、東京図書館（後の帝国図書館）によって明治20（1887）年に制定された八門分類です（図1）。しかし八門分類は、分類目録の編成にのみ使用される書誌分類であり、分類記号を有していないという欠点がありました。

帝国図書館を始めとする当時の大規模な閉架式図書館では、主題とは関係なく、資料の大きさや資料を受け入れた順で書庫に並べて管理していました（固定排架法）。資料の排架場所を分類記号で示す必然性は特になかったのです。

しかし、図書館の蔵書が増えてくると、固定排架法では出納作業やレファレンス業務に支障が出始め、資料を主題に応じて書架に並べるための書架分類法が求めら

れるようになっていきます。

十進分類法

八門分類に替わって日本の分類法に大きな影響を与えたのは、デュイ（Melvil Dewey）が1876年に発表した十進分類法（DDC）でした。

DDCは、0から9の数字を用い、主題を十進法によって表現するわかりやすい記号法と、詳細な相関索引を発案したこと、英語圏の図書館に普及し、標準分類法としての地位を確立していました。

日本で最初の十進分類法については諸説ありますが、1900年前後にはDDCを参考とした分類法が登場し、1910年代には多くの図書館でDDCを応用した分類法が作成されたことがわかっていきます。このうち、山口図書館の館長である佐野友三郎によって明治42（1909）年に作成された「山口図書館分類表」は、八門分類の8類を10類に再編成して十進記号を付したもので、図書館界に大きな影響を与えました（図2）。

十進分類法が広まると軌を一にして、標準分類法を求める声が強んになります。大正7（1918）年に全国府県立図書館長会議で「標準分類法制定に関する件」が取り上げられると、翌年の府県立図書館協議会で、ついに「山口図書館分類表の百区分

圖書分類綱目	
〇〇〇	總記
〇〇〇	哲學
一〇〇〇	教育
二〇〇〇	文學、語學
三〇〇〇	歷史、地理
四〇〇〇	法制、經濟、社會、統計
五〇〇〇	理學、醫學
六〇〇〇	工學、農事
七〇〇〇	美術、演藝
八〇〇〇	藝術、諸藝
九〇〇〇	彙纂
〇〇〇	總記
〇〇〇	書目
〇〇〇	哲學
〇〇〇	教育
〇〇〇	文學、語學
〇〇〇	歷史、地理
〇〇〇	法制、經濟、社會、統計
〇〇〇	理學、醫學
〇〇〇	工學、農事
〇〇〇	美術、演藝
〇〇〇	藝術、諸藝
〇〇〇	彙纂
一七三	史傳
一七四	修身、教訓、事類
一七五	禮式、作法
一七六	論說
一八〇	支那哲學
一八一	史傳
一八二	史傳
一八三	史傳
一八四	史傳
一八五	經書
一八六	子部
一八七	日本圖書
一八八	史傳
二〇〇	教育
二〇一	史傳
二〇二	史傳
二〇三	史傳
二〇四	教育制度
二〇五	學事報告
二〇六	論說
二〇七	論說
二一〇	教育學
二一一	兒童心理、兒童研究
二一二	實地教育
二一三	管理、訓練
二一四	管理、訓練
二一五	管理、訓練
二一六	管理、訓練
二一七	管理、訓練
二一八	管理、訓練
二一九	管理、訓練
三六四	雜著
三七〇	語學
三七二	音韻
三八〇	國語
三八一	音韻
三八二	史傳
三八三	文學、音韻、仮名遣
三八四	文學、音韻、仮名遣
三八五	語法、語源にてを以て
三八六	語源、語釋
三八七	俗語、方言、諺
三八八	言文一致、羅馬字
三九〇	外國語
三九一	支那語
三九二	韓語
三九三	印度語
三九五	英語
三九六	國語
三九七	佛語
三九八	露語
三九九	國語
四〇〇	歷史
四〇一	年表、年表、歷史地圖
四〇二	年表、年表、歷史地圖
四〇三	萬國史

図2 山口図書館分類表
『山口図書館和漢書分類目録(明治42年12月末現在)』より
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/897367/200>

帝國圖書館和漢圖書分類目録第一、第二門	
目次	
第一門 神書及宗教	
一	總記
二	神道
三	佛敎
四	神祇、祓禊、祭祀
五	佛敎史
六	佛敎家傳記、佛敎遺蹟、佛敎美術
七	佛敎文學
八	佛敎藝術
九	佛敎音樂
一〇	佛敎醫學
一一	佛敎社會學
一二	佛敎經濟學
一三	佛敎政治學
一四	佛敎法律學
一五	佛敎哲學
一六	佛敎倫理學
一七	佛敎教育學
一八	佛敎宗敎學
一九	佛敎社會學
二〇	佛敎經濟學
二一	佛敎政治學
二二	佛敎法律學
二三	佛敎哲學
二四	佛敎倫理學
二五	佛敎教育學
二六	佛敎宗敎學
二七	佛敎社會學
二八	佛敎經濟學
二九	佛敎政治學
三〇	佛敎法律學
三一	佛敎哲學
三二	佛敎倫理學
三三	佛敎教育學
三四	佛敎宗敎學
三五	佛敎社會學
三六	佛敎經濟學
三七	佛敎政治學
三八	佛敎法律學
三九	佛敎哲學
四〇	佛敎倫理學
四一	佛敎教育學
四二	佛敎宗敎學
四三	佛敎社會學
四四	佛敎經濟學
四五	佛敎政治學
四六	佛敎法律學
四七	佛敎哲學
四八	佛敎倫理學
四九	佛敎教育學
五〇	佛敎宗敎學
五一	佛敎社會學
五二	佛敎經濟學
五三	佛敎政治學
五四	佛敎法律學
五五	佛敎哲學
五六	佛敎倫理學
五七	佛敎教育學
五八	佛敎宗敎學
五九	佛敎社會學
六〇	佛敎經濟學
六一	佛敎政治學
六二	佛敎法律學
六三	佛敎哲學
六四	佛敎倫理學
六五	佛敎教育學
六六	佛敎宗敎學
六七	佛敎社會學
六八	佛敎經濟學
六九	佛敎政治學
七〇	佛敎法律學
七一	佛敎哲學
七二	佛敎倫理學
七三	佛敎教育學
七四	佛敎宗敎學
七五	佛敎社會學
七六	佛敎經濟學
七七	佛敎政治學
七八	佛敎法律學
七九	佛敎哲學
八〇	佛敎倫理學
八一	佛敎教育學
八二	佛敎宗敎學
八三	佛敎社會學
八四	佛敎經濟學
八五	佛敎政治學
八六	佛敎法律學
八七	佛敎哲學
八八	佛敎倫理學
八九	佛敎教育學
九〇	佛敎宗敎學
九一	佛敎社會學
九二	佛敎經濟學
九三	佛敎政治學
九四	佛敎法律學
九五	佛敎哲學
九六	佛敎倫理學
九七	佛敎教育學
九八	佛敎宗敎學
九九	佛敎社會學
一〇〇	佛敎經濟學

図1 帝國圖書館の八門分類。1門の「社寺」を見ると、分類記号に該当するものがないことがわかります(カコミ部分)。
『帝國圖書館和漢圖書分類目録分類目録 第一、第二門』目次部分
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991399/3>

を標準分類表とする」ことが決定されました。しかし、この決定にもかかわらず、山口図書館分類表が全国の図書館に普及・定着することはありませんでした。その原因としては、そもそも図書館にとって分類法の全面的な変更には大変な労力がかかること、変更を決意したとしても、わずか100区分の表では実用的といえず、山口図書館分類表を独自に改変する図書館が相次いだこと等が挙げられています。

標準分類法を求める背景

山口図書館分類表による統一は失敗に終わりましたが、図書館分類法の標準化を求める動きは昭和時代に入って再び盛んになります。こうした動きの背景には、図書館の量的な拡大がありました。

日本では、公共図書館が社会的に認知され始める明治30年前後から、各地で図書館が新設されるようになりました。大正時代に入ると図書館数は飛躍的に増え、特に大正11(1922)〜昭和元(1926)年の5年間は、1900館以上の図書館が新設されるほどでした。しかし、量的には増えたものの、図書館の経営方法については、いまだ手探りのままの状況でした。そのため、図書館界では、標準分類法の制定を始めとして、図書館経営の指針となる基準を求め

る声が高まりました。こうした状況の中で登場したのがNDCでした。

NDCの誕生

和洋図書共用十進分類表案とNDC

NDCの創案者であるもり・きよし(森清)は、明治39(1906)年に大阪で生まれ、大阪市立実業学校商業本科に在学中、ローマ字運動に参加したことがきっかけで間宮不二雄に出会います。

間宮不二雄は、大正11(1922)年に日本初の図書館用品専門店「間宮商店」を大阪で創業、図書館用品の発売や図書館学の研究書等を出版した実業家であり、図書館学の研究者でもありました。昭和2(1927)年には若手の図書館員を糾合して「青年図書館員聯盟」を結成し、整理業務の標準化にあたるなど、図書館界の発展に尽力した人物として知られています。

大正11年、間宮商店に就職したもりは、業務の傍ら、図書館学を中心とする業務参考コレクション「間宮文庫」の整理にあたります。間宮文庫はNDCで整理されており、その分類整理業務はNDCを作る素因となりました。

昭和3(1928)年、もりは、青年図書館員聯盟の機関紙『圖書館研究』第1巻2号で

昭和3(1928)年、もりは、青年図書館員聯盟の機関紙『圖書館研究』第1巻2号で

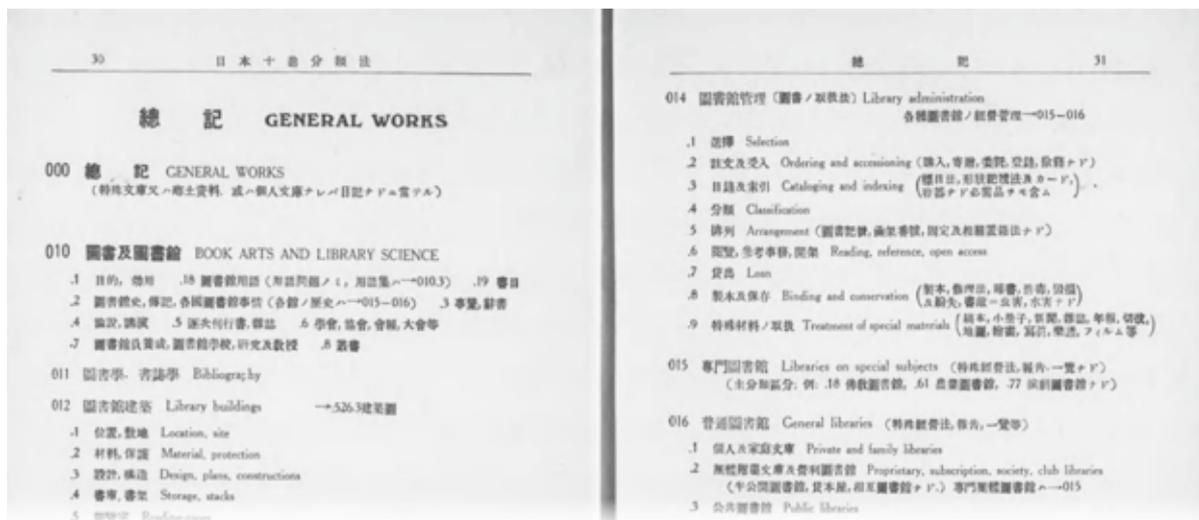


図3 『日本十進分類法：和漢洋書共用分類表及索引』より

3号に「和洋図書共用十進分類表案」を発表します。また、DDCにならって詳細な関連索引を用意しました。

翌年、もりはこの案に基づいて『日本十進分類法・和漢洋書共用分類表及索引』(図3)を刊行します。英語名は“Nippon Decimal Classification”。NDCの誕生日です。発行日はもりの誕生日である8月25日でした。

標準分類は利用者のために

NDCの登場は、図書館界に大きな反響を呼びました。当時和歌山高商業学校図書課に勤務していた鈴木賢祐は、他の分類表と比べてNDCが最も理論的で緻密であり、「標準分類表たるに充分である」と結論づけました。

その一方で、図書館分類法を統一しようとする運動そのものに対する批判もありました。規模や種類の異なる図書館が統一された分類法を画一的に適用する必要はない、それぞれの図書館は独自に分類法を作成すればよく、むしろ分類作業者の能力向上の方が先決だろう——といった論点です。

これに対して鈴木は、標準分類法によって分類作業者の負担が減るのはもちろんのこと、複数の図書館を利用する利用者にとっても検索の能率が上がることを強調

し、標準分類法の意義を強く主張しました。これまで、標準分類法に関する議論は図書館急増への対応策として語られがちでしたが、鈴木の主張は、分類表が何よりも利用者のためのものであることを説いた点で非常に重要なものでした。

NDCの普及

鈴木賢祐は理論面でNDCを支援しましたが、実務面では当時帝国図書館員であった加藤宗厚の支援がありました。刊行後すぐにNDC初版を目にした加藤は、早速、当時講師を務めていた文部省図書館講習所の図書分類法の講義テキストにNDCを採用します。また、昭和5(1930)年に『図書館雑誌』の編集を担当すると、8月号から「日本図書館協会選定新刊図書目録」をNDCによる分類に切り替えました。こうした努力によって、NDCを採用する図書館が次第に現れ始め、NDCは少しずつ図書館に定着していきました。

第二次世界大戦が終わると、全国の図書館が戦災復興に取り組む中で、NDCの需要は急速に高まります。

学校図書館の整備が進められる中で、昭和23(1948)年に刊行された文部省編『学校図書館の手引』では、NDCが学校図書館の分類法に推奨されました。『学校図書

館の手引』にNDCが掲載されたことは、NDCが「国定に準ずる」と受け止められ、NDCが標準分類法として認められるきっかけとなりました。

さらに同じ年には、設立間もない国立国会図書館がNDCを採用し、和漢書の整理を開始しました。これと前後して、国立国会図書館の発足を援助するために来日した連合国総司令部特別顧問のダウンズも、国立国会図書館に対して、和漢書の分類法にNDCを採用することを勧告しました。ダウンズは、全国の図書館が国立国会図書館の付与した分類記号を利用できるよう、国立国会図書館が先達となって分類法を統一するべきだと考えていたのです。

これらが契機となり、NDCは日本の図書館界に急速に普及していきました。現在では名実ともに日本の標準分類法の地位を確立しています。(高橋 良平)

NDCの歴史について、より詳しくは、NDL 書誌情報ニュースレター「日本十進分類法(NDC)の歴史」前編および後編(2016年4号および2017年1号に掲載)をご覧ください。
http://www.ndl.go.jp/jp/data/bib_newsletter/



What's 書誌調整

こんにちワン、カーネです。
国立国会図書館が、新しい分類表を使うことにしたらしいワン。
なんでも、NDC 9 版から改訂されたNDC 10 版っていう
分類表らしいけど、それってなにが変わったんだろ？
ということで、先生に聞いてみることにしたワン！

第 9 回

NDC 10 版がやってきた！

NDC
10th ed.
has
come!

カーネ

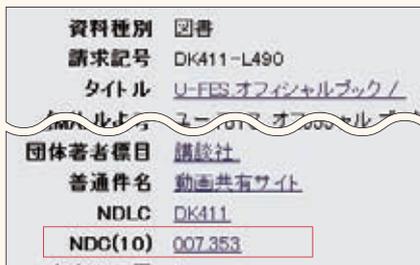


図 1 NDL - OPACの書誌データ表示画面例

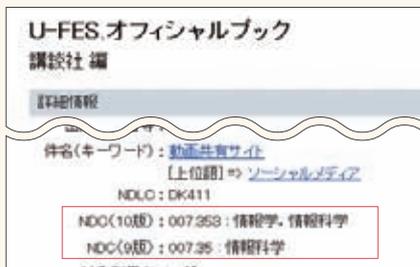


図 2 NDL 検索の書誌データ表示画面例

先生…カーネには以前NDCについて説明したことがありましたね。⁽¹⁾ 覚えているかな？

カーネ…えーと、うーんと……あっ、思い出しました！ 本のテーマを数字で表す分類法です。日本十進分類表ですよ。ほとんどの近所の図書館もNDCの順で本を並べていました。妖精についての本が388.3 (ヨーロッパの伝説民話)の棚にあったワン！

先生…そのとおり。NDC9版が出たのは今から約20年前の1995年。そして2014年12月日本図書館協会から、待望の最新版であるNDC10版が刊行されました。国立国会図書館は、今年4月からこの分類表を使い始めたのです。

カーネ…で、いったいなにが変わったんですか？

先生…それでは、NDL-OPAC (国立国会図書館蔵書検索・申込システム) で書誌データを覗いてみましょう(図1)。

カーネ…あっ、「NDC(10)」って書いてあるワン！

先生…これは、「この本のテーマを、NDC10版の記号で表していますよ」ということを示しているのです。4月から、国立国会図書館が新しく作る和書資料(一部を除く)などの書誌データには、NDC10版の記号をつけることになったんですよ。⁽²⁾

カーネ…そっなんだ〜。

先生…国立国会図書館の書誌データは、NDLサーチ(国立国会図書館サーチ)ではこのように表示されます(図2)。当面はNDC9版を使い続ける人や図書館のため、NDC10版の分類記号に加えて、それを機械的に変換したNDC9版の記号もつけているのがポイントです。⁽³⁾

カーネ…NDC10版を使うことになって、国立国会図書館の書誌データではこんなふうに変わったんですね！ でも、NDC9版とNDC10版って、そもそもどう違うんですか？

先生…NDCのおおまかな体系はそのままです。ですが、ひとつひとつの項目では変わったところがいくつもあります。⁽⁴⁾ 実際に分類表を見て比べてみましょう。ここに掲げたNDC9版(左)とNDC10版(右)、どこが変わったかわかりますか？(図3)

742	写真器械・材料 Camera and photographic materials
.2	感光材料：写真乾板、フィルム、印画紙→：572.7：578.57
.4	写真薬品・処方
.5	写真機 [カメラ] →：535.85 *シャッター、フィルタ、露出計、付属品などを含む *カメラの使い方は、ここに収める
.6	レンズ →：535.87
.8	設備：スタジオ、暗室

742	写真器械・材料 Camera and photographic materials
.2	感光材料：写真乾板、フィルム、印画紙→：572.7：578.57
.4	写真薬品・処方
.5	カメラ [写真機] →：535.85 *シャッター、フィルター、露出計、付属品は、ここに収める *カメラの使い方は、ここに収める
.52 ⁺	デジタルカメラ
.6	レンズ →：535.87
.8	設備：スタジオ、暗室

図3 NDC 9版とNDC 10版における742(写真器械・材料)の比較。左がNDC 9版、右がNDC 10版からの抜粋

007.35	情報産業、情報サービス →：547.48：694
.353 ⁺	ソーシャルメディア：電子掲示板、ブログ、ウィキ、ソーシャルネットワーキングサービス [SNS] *画像・動画共有サイトは、ここに収める
.37 ⁺	情報セキュリティ→：007.609：547.48 *ここには、情報セキュリティ(一般)を収める
.375 ⁺	不正操作：コンピュータウイルス、ハッキング、クラッキング、マルウェア、スパイウェア



図4 NDC 10版における007.3(情報と社会)からの抜粋

カーネ：じーっ……。あっ、NDC 10版のほうには、「デジタルカメラ」って項目があるワーン！

先生：正解です。NDC 10版では、742.52として、「デジタルカメラ」の項目が新設されました。分類記号の右肩にプラス印(+)がついているのが、新設項目の目印です。NDC 9版が出た1995年ごろ、デジタルカメラは現在ほど一般に普及していませんでしたが、その後デジタルカメラについての本がたくさん出版されるようになりました。そのような状況に対応して、この項目が新設されたのです。

カーネ：なるほど。そういうことですね。

先生：NDCは、ありとあらゆる知識を網羅し体系化することで、どんな主題、どんなテーマの図書でも知識の体系のなかに位置づけて分類できるようにしています。ですので、世の中が変わって新しく出てきた主題に対応するため、定期的な改訂が必要となります。とくにNDC 9版の刊行からの20年間で、インターネットの登場など情報学の分野はとてつもなく発展しました。それに応じて、007(情報学・情報科学)は大きく見直されました。例として007.3(情報と社会)のところを見てみましょう(図4)。

カーネ：ホントだ、新しくできた項目のプラス印(+)がたたくさんあるワーン！「ソーシャルメディア」(007.353)とか「情報セキュリティ」(007.37)とかの項目ができたんですね。

- 1 本誌 660 (2016年4月)号 pp.25-28
- 2 NDLでNDC 10版による分類を付与している資料群は、NDC 9版を付与していたものと同じです。和図書資料以外にも、パッケージ系電子資料や地図資料にもNDC 10版を付与しています。詳細は以下のページの「書誌データ水準」をご覧ください。http://www.ndl.go.jp/jp/data/catstandards/levels.html
- 3 これは、NDC 10版の取り込みシステムが対応していない各種図書館向けに実施する、限定した処理です。NDLサーチにおけるNDC 10版への対応の詳細については、以下をご覧ください。「国立国会図書館サーチにおけるNDC 10版適用開始について」http://iss.ndl.go.jp/information/2017/01/20_announce-3/
- 4 NDC 10版への改訂の方針や概要については、以下をご覧ください。大曲俊雄「NDC 10版の変ったところ」『専門図書館』272, pp.32-36, 2015 藤倉恵一「日本十進分類法(NDC)新訂10版を概観する」『大学図書館問題研究会誌』40, pp.11-24, 2015
- 5 NDLのNDC 10版適用の方針等については、以下をご覧ください。「2017年4月から『日本十進分類法』新訂10版(NDC 10版)を適用します」『NDL書誌情報ニュースレター』2016年4月号 http://www.ndl.go.jp/jp/data/bib_newsletter/2016_4/article_01.html

木下 竜馬

(収集書誌部 収集・書誌調整課(執筆当時))

分類表の改訂から世の中の中の移り変わりが分かって、おもしろいワーン！

先生：NDCは、1929年に初版が発行されてから、時代の変化に引き合い10版まで改訂を重ねてきました。知識の体系をより適切に表現し、新たな物事や概念を分類するため、これからも変化し続けていくでしょう。NDLをはじめ、図書館はNDCの改訂に対応していくことが必要になります。

カーネ：新しいNDC 10版を使っていくのって大事なことだったんですね。先生、ありがとうございます！

和風パスタ専門のレストランチェーンが社史を出版したら、以下のどこに分類しますか? 『日本十進分類法』(NDC)には、「673.97 飲食店」の下に、「971 日本料理店 . 972 中国料理店 . アジア・アラブ料理店 . 973 西洋料理店 . 974 その他の料理店」という項目があります。和風パスタは、日本料理ではないですね。パスタですから、西洋料理でしょうか。でも和風だし、よくわからないから「その他の料理店」にしてよい? それとも上位の「飲食店」にする? こうした悩みを解決するために、当館ではNDC9版の項目に対する解釈や運用方法を定めた「分類基準」を設けていました。「その他の料理店」は不使用とし、和風パスタのようによくわからない料理店は上位の「飲食店」に分類してました。また「556 各種の船舶・艦艇」の低位には、「3 商船 . 4 旅客船 . 5 客貨船 . 6 貨物船」という項目が同列で並んでいましたが、旅客船から貨物船は、商船の低位概念であると判断して、「556.4/6は、商船の低位の分類項目と解する」と規定していました。

今回、NDCが新訂10版になるにあたり、これ

らの分類基準をすべて見直し、当館独自のものができる限りなくすことにしました。作成した書誌データを全国の図書館や利用者の皆様に使っていただきやすくするためです。料理店の例では、NDC10版に準拠して「673.974 その他の料理店」を日本・アジア・西洋以外の地域の料理を提供する店に使用し、上位の「飲食店」は和食も中華も西洋料理も提供するような店に使用すると改めました。今後和風パスタ店の社史が実際に来たら、メニューと新しい規定を照らし合わせて分類します。商船の例では、NDC10版で旅客船から貨物船の分類項目が商船の低位項目に改められたため、当館の規定が不要になり削除しました。2年間かけて各分野の規定を、参考書や専門書を調べながら見直すうちに、外食産業から船舶まで、日常生活には不要かもしれない知識がたくさん身につけてしまいました。検討のために2年間めくり続けた私のNDC10版の小口は、10年以上使い込まれたNDC9版同様に、すでに手垢で真っ黒です。これからも黒くなったNDC10版を相棒に、図書の整理をしていきます。

(国内資料課 主題1)



めくり続けて
真っ黒になるまで



世界図書館紀行

北米・欧州図書館巡行記 欧州編

よしいえ 吉家 あかね



see also...

「欧米国立図書館のRDA適用状況に関する調査報告」『NDL書誌情報ニュースレター』2016年2号(通号37号)

http://www.ndl.go.jp/jp/data/bib_newsletter/2016_2/article_02.html

「デジタル時代における国立図書館の蔵書構築—欧米国立図書館を対象とした調査報告—」『カレントアウェアネス』(CA1883)

<http://current.ndl.go.jp/ca1883>

平成27年11月から12月にかけて、私は北米と欧州の国立図書館を訪問し、各図書館の収集業務と目録作成業務について調査する機会に恵まれました。前月号の北米編に引き続き、訪問中の出来事や、お世話になった職員の方々をご紹介します。欧州各地の図書館の雰囲気をお伝えしたいと思います。





改装工事中のウンター・デン・リンデン館。
左は大閲覧室。天井からはアルミ製のオブジェ
が取り付けられています。建築費用のうち、一定
の割合を、こうした美術作品の購入に充てることが
義務付けられているとのこと。



SBB

Staatsbibliothek zu Berlin
ベルリン国立図書館

ポツダム通り館



目録作成部門の
ヒルギット・ラッテイさん



ヨセフ・ケールさん

ドイツでは、ベルリン国立図書館とドイツ国立図書館（ライプツィヒ館、フランクフルト館）を訪問しました。

本誌2016年2月号の「世界図書館紀行」ですでご紹介しているとおり、ベルリン国立図書館（以下SBB）とドイツ国立図書館（以下DNB）は、東西ドイツそれぞれの地域で中心的な機能を担った図書館が、ドイツ統一後に統合して誕生した図書館です。どちらの図書館も、現在は元の境界を超えて問題なく連携しているとのことでしたが、図書館機能に影響のない範囲で、東西の境界が残る一面もあるようです。たとえばDNBでは、旧東ドイツ領下のライプツィヒ館、旧西ドイツ領下のフランクフルト館との間で、業務上の往来は盛んですが、人事配置の面では小規模の交流があるのみで、基本的に館をまたいだ異動はないそうです。

SBBのウンター・デン・リンデン館で利用者案内部門を統括しているヨセフ・ケールさんは、旧西ドイツ出身で、組織の統合直後に、旧西側にあるポツダム通り館

から旧東側のウンター・デン・リンデン館に異動してきました。ヨセフさんが旧東側区域に入っている印象的だったのは、排気ガスのにおいだったそうです。ヨセフさんはとくべつ気にしなかったようですが、当時は東西どちらの職員も、旧境界線を越えることには不安があったといえます。いまは東西の職員が同じ部署にいるケースも増えましたが、依然旧東ドイツ出身者が大半を占める部署もあるそうです。当時を知る方からお話を聞く貴重な時間となりました。

ちなみに訪問当日のヨセフさんのお仕事は、カウンターでの利用者案内。電話での案内も交代で行っているそうですが、きれいに色分けされた、見るからに高機能なエクセル当番表を見せていただきました。さすがドイツ……という陳腐な感想を呑み込んで話の続きを聞くと、電話案内も一部テレワークで行っているとのこと。館内から回答する際も、当番職員が専用電話の前に座るのではなく、担当時間ごとに電話を切り替えることで、それぞれの事務スペースで対応しているのだそうです。



BnF

Bibliothèque nationale
de France
フランス国立図書館

フランクフルトからパリまで、国際列車のICE（インターシティ・エクスプレス）で向かいます。国境を超えたあたりで、筋肉隆々の警察官が車両の出入口をふさぎ、なかば陽気なふうを装って「パスポート！」の掛け声で検問を始めると、車内は一気に緊張感で満たされました。出身地をたずねられてしどろもどろになっている中東系の青年が通路を引きずられていき、ドアの向こうで尋問を受けているのが見え、こちらも落ち着いていられません。

パリでのテロの約3週間後、しかも事前に予約していたホテルが、事件現場となったバタ克蘭劇場と近かったこともあり、少しおびえてのパリ入りとなりましたが、通りに警察官が多いことを除けば、街中は普段と変わらないように思われるにぎわいでした。週末の宵、大通りに面したカフェはまんべんなく混雑しています。

フランス国立図書館（以下BnF）でも、事件直後の休館だけでなく、営業時間が短縮されたり、持ち込み荷物の制限が強化されたり等の影響があったようです。念のため、面会の日時に変わりがなければ、BnFで蔵書構築方針の編集を担当するシルヴィ・ボンネルさんに事前に連絡をとってみたいところ、予定に変更なしというお返事に、こう書き添えられています。



建物が本の形をしたミットラン館。上層階部分が書庫スペースにあてられています。



セントパンクラス館のアリス展

BL

British Library
英国図書館



さていよいよ旅も終盤、ユーロスターに乗ってイギリスに入ります。イギリス国内での最初の訪問先は、ロンドンの英国図書館（以下BL）セントパンクラス館です。こちらの図書館も昔は利用の敷居が高かったと評されることが多いのですが、いまやその入口ロビーには幼児の姿もちらほら見えるほどの開放的な空間になっています。私が訪問したときは館内のフリースペースで『不思議の国のアリス』展、別の専用スペースでは各国の印刷文化をたどる貴重書の無料展示と、西アフリカの言語芸術と音楽に関する有

料展示“West Africa: Word, Symbol, Song”が行われていました。余談ですが、2016年に開催されたパンクミュージック誕生40周年の展示“Punk 1976-78”は、公的機関の主催であることについて、パンクの当事者間でもその賛否が分かれ、大きな話題となりました。BLといえば、デジタル環境下における新しい図書館へと積極的に脱皮を試みている先駆的存在ですが、人が集う場としての魅力を高めるという「アナログ」な指向も持ち合わせていることに新鮮な驚きを覚えました。



スウナおるヨ。

書庫と案内していただきました
パツニゾローさん



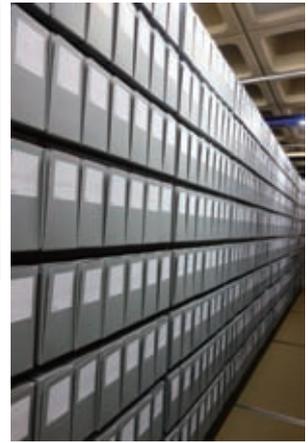
故障して
ならならたら...?

ロンドンのセントパンクラス館からおよそ300kmの距離にあるポストンスバ館。巨大な自動書庫設備を備えています。

クリスマスを前にして、飾り付けがされた事務スペース



書庫スペース不足は悩ましい問題。省スペース化を図って、工夫がこらされています。



ベストに関する展示。棺桶を模した展示ケースが並んでいます。棺をあけると…



次いでスコットランド国立図書館（以下NLS）のあるエディンバラへ。こちらでは、蔵書構築部長のグレアム・フォーブスさんにお世話になりました。NLSの方針についてグレアムさんにいろいろおたずねする度、NDLではどうなのかという逆質問を受けます。いちど、いたずらな笑みを浮かべたグレアムさんに「デモクラティックにやらないとね」と返され、はてなと思っていたところ、インタビュ終盤で謎がとけました。グレアムさんがさっと一枚の紙を取り出し読み上げたのは、NDLの設立理念（「真理がわれらを自由にする」という確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、

ここに設立される）。グレアムさんはNDLホームページで予習してくださっていたのでした。理念の前半部分は東京本館図書カウンターの前に掲げられ、NDL職員の間でも意識する機会の多い一節ですが、後半部分はこうしてあらためて提示されてみると、自分がとくべつな注意をはらっていないことに思い至りました。日常の業務に忙殺されるなかでも、職員の仕事のひとつひとつがこれらの理想につながることを意識しなおさなければなりません。

グレアムさんの部署にはスコットランド国旗が大きく掲げてありました。スコットランドの独立投票が行われたのは、私の訪問の一年前です。独立について職場で話

題になるかという質問には、もちろんとの答えでした。NLSはスコットランド内の出版物の収集と保存を第一の使命としつつ、英国の納本図書館のひとつであることを活かし、スコットランド外の英国出版物も多く収集しています。そのことを念頭に置きつつ、独立が実現した暁には現在の収集体制が崩れてしまうのではと質問したところ、現時点で具体的な懸念はないが、なんらかの影響はありうるだろうとのことでした。蔵書構築方針ひとつをとっても、国立図書館の業務がその地域のありかたに大きく関係していることがうかがわれる一面でした。



グレアムさんと目録作成部門のニールさん。手に持っているのはおみやげにさしあげたNDL特製のクリアファイル。





アベリストウイスの海岸

さて、最後に向かうはウェールズ。ウェールズ国立図書館（以下NLW）はウェールズ中部、西岸沿いのアベリストウイスという町にあります。1905年に図書館と博物館の設立が決まった際、アベリストウイスと首都カーディフの間で招致合戦が繰り広げられた結果、図書館機能のみがこちらアベリストウイスに置かれることとなり、1907年にNLWが設立されました。

アベリストウイスは風光明媚なリゾート地ですが、オフシーズンにの海岸通りは人の姿もまばら。でも、曇天と黒い海を背景にした、うらさびしい街並みにもまた趣があるものです。大都市をあわただしく渡り歩いてきた後に落ち着く

にはびつたり町の町でした。クリスマスを前にして、目抜き通りの本屋には、ウェールズ出身の詩人ダイラン・トマス『ウェールズの子どものクリスマス』がずらりと並んでいます。

NLWは、街を見下ろす丘の上に位置します。職員が300人程度と、国立図書館としては小さな規模の図書館です。おもに世話になったのは、蔵書構築を担当しているマノン・フォスター・エバンスさんです。現地ではウェールズ語と英語の2ヶ国語表示が一般的でしたが、地元出身のマノンさんの日常言語はウェールズ語だそう。最初にウェールズ語を覚え

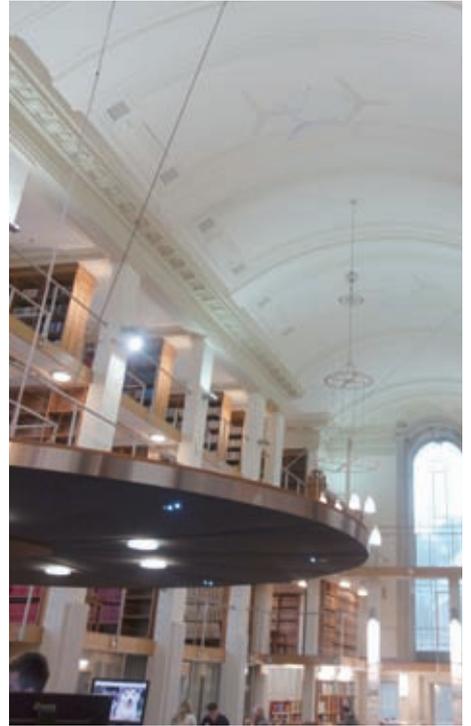


館名もウェールズ語と英語の2言語表記





ウェールズ関連展示。左はレベルミュージック（反体制の音楽）のジュークボックス。



ウェールズの古地図システムとマンソンさん

その後、テレビや学校教育のなかで英語を身に着け、バイリンガルになるそうです。非英語圏からきた私を氣遣ってください、何日間もネイティブスピードの英語にさらされて憔悴していた私には、癒しの訪問となりました。

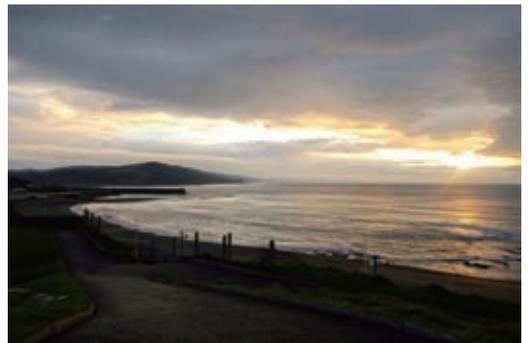
訪問した各図書館に共通してみられた特徴でもありました。

さて1ヶ月に及んだ図書館巡行も、ようやく終了。早朝のアペリストウイスを発つ電車の窓から、丘の上に立つNLWが見えます。長いようで短かった旅を名残惜しく思う一方、はやくこの経験をだれかに伝えたいと気が早く帰路となりました。この旅が終わって1年以上経ちますが、ときどき旅のなかのいろいろな場面がふと眼前によみがえります。私はひとりの図書館員として旅に出ましたが、その肩書から期待できる以上のものを得ました。訪ねた土地の風景、図書館のたたずまい、お会いした方々のまなざしとことば、これらひとつひとつの記憶をこれからの糧としてNDLでの仕事に励みたいと思います。

お名前を挙げなかった方々も含め、訪問先のみなさまには大変お世話になりました。この場を借りて、心から御礼申し上げます。



アペリストウイス城跡



本屋に

ない

本



ワイン展 Wine THE EXHIBITION

ぶどうから生まれた奇跡

国立科学博物館，読売新聞社 編
c2015 141p 31cm
<請求記号 PA416-L17>

ワインとビールでは、どちらが長い歴史を持つだろうか。

答えはワインだ。ワインは今から約8千年前に西アジアで生まれたとされている。ビールも同じく西アジアで、早ければ約5500年前までには造られていた可能性があるが、それでもワインとは2千年以上の差がある。

ワインはブドウに含まれる糖を発酵させるだけで造ることができのに対し、ビールは麦に含まれるデンプンを切断してブドウ糖に変え、その上で発酵させる必要があるため、生産の工程がより複雑なものとなる。両者の誕生時期の差は、これに由来するようだ。

本書は、国立科学博物館で開催された「ワイン展」の図録である。太古の

昔より人々に親しまれてきたワインを様々な観点からわかりやすく紹介している。ブドウの栽培からワイン造り・出荷までのあらましを紹介する「ワイナリーに行ってみよう」、西アジアで生まれたワインが数千年の時を経て世界へ広がっていった足跡をたどる「ワインの歴史」、味・香りはもちろんのこと、ボトルやグラスといったワイン

美術を含めたワインの楽しみ方を教えてくれる「ワインをもっと楽しむ」の3部構成で、表紙は赤ワイン、裏表紙は白ワインをイメージしたとおぼしきスタイリッシュな装丁も特徴的だ。

科学博物館で行われた展覧会だけあつて全体的にアカデミックかつ科学的な観点からの記述が多く、ありふれ

た「ワイン入門書」とは一線を画す内容となっている。ブドウの枝のせん定方式ごとの特徴など、専門的ながら興味深い記述もあつて面白い。

「ワインの歴史」には、太平洋戦争中、軍事利用のために日本でワインの増産が行われたというエピソードが登場する。軍事利用といっても、軍で飲用とするためではない。ワインに多く含まれる酒石酸から作られるロッシェル塩が高感度ソナーの心臓部の材料となるため、対潜水艦用の水中聴音機に用いられたのだ。ワインが兵器の材料であつたという事実には大いに驚かされた。

「ワインをもっと楽しむ」の最後では、日本のワイン生産の現状にも触れ

ている。国産のブドウを使った「日本ワイン」は品質の向上とともに近年評価を高めているという。日本ワインが輸出品として世界に誇れる日本ブランドの一つとなってくれることを期待したい。

「ワイン展」ではミュージアムショップにおいてワインが販売されており、展示を観覧した直後の私も思わず購入してしまった。この図録も展覧会と同様、読了後にはワインを飲みたくなるような一冊に仕上がっている。本書で知識を深めた上で、その歴史と文化・科学に思いをよせながらワインを味わってみてはいかがだろうか。

(西川久司 ひさし)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

NDL Topics

国立国会図書館の平成29年度予算

国の平成29年度予算が平成29年3月27日に成立しました。国立国会図書館の平成29年度歳出予算額は、222億1319万9000円です。前年度の当初予算額と比較すると、関西館第2期第1段階施設整備工事の本格化等に伴い、約26億5700万円の増額となりました。

平成29年度予算のおもな内容は、次のとおりです。

○関西館第2期第1段階施設整備

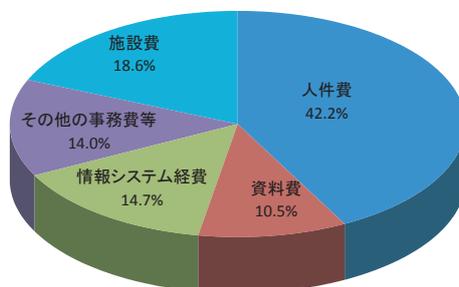
平成26年11月の国立国会図書館建築委員会勧告に基づき、平成28年度から、関西館において新たな書庫棟の建設工事に着手しました（平成31年度末竣工予定）。平成28年度からの4か年の国庫債務負担行為総額約143億2600万円が認められており、平成29年度は、工事に必要な経費として約28億9700万円が計上されました。

○デジタルコンテンツの拡充

国立国会図書館では、我が国の知識・文化の基盤となる出版物への安定的で永続的なアクセスを可能とするため、デジタル・アーカイブ事業を推進しています。平成29年度においては、我が国のイノベーションと価値創出等に資することを目的として、科学技術情報に関するデジタルコンテンツの拡充に着手します。また、平成13年度までに製作したカセットテープ等による視覚障害者用録音図書についても、デジタル化を開始します。このほか、資料の利用と保存の両立の観点

から行っている国内刊行資料のデジタル化も計画的に推進します。これらの事業に必要な経費として、平成29年度は約2億3700万円が計上されました。

予算の費目別構成比（平成29年度）



平成29年度歳出予算額 (単位：千円)

(項) 国立国会図書館	18,083,495
人件費	9,382,691
国立国会図書館共通経費	174,315
国会サービス経費	305,734
資料費	2,336,057
うち納入出版物代償金	390,248
情報システム経費	3,261,313
東京本館業務経費	1,514,632
国際子ども図書館業務経費	259,975
関西館業務経費	848,778
(項) 国立国会図書館施設費	4,129,704
関西館第2期第1段階施設整備費	2,896,882
東京本館庁舎整備費	648,712
関西館庁舎整備費	163,044
国際子ども図書館庁舎整備費	421,066
計	22,213,199

新刊案内

レファレンス 795号

MICEの振興と基盤整備

北方領土における経済及び社会の現状と課題

— 2015年の年次報告から —

高齢化と世帯数減少下の家計消費の行方

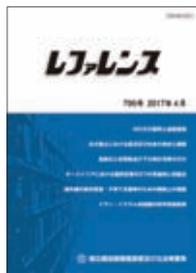
— 家計消費変動の要因分解を踏まえて —

オーストラリアにおける国民投票の3つの実施例と問題点

諸外国の就労促進・子育て支援等のための税制上の措置

— 所得課税に関連して —

イラン・イスラム共和国の科学技術政策



A4 146頁 月刊 1,000円(税別)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

訂正

本誌673(2017年5月)号20頁「日本におけるマンガ研究」に誤りがありました。
『ラックジャック』の、表紙に写実的なイラストを用いたハードカバー版は、1987年(手塚治虫の生前)に刊行されています。
お詫びして訂正いたします。

NO. 674
JUNE 2017

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
A painter of fog—London, a city Makino Yoshio loved
- 04 Strolling around Edo period Nagatacho on old maps
- 10 Browsing library materials—A look at documents from medieval Japan, Part 2
Shoguns of the Kamakura Bakufu “reigned but did not rule” ?
- 13 Nihon jisshin bunruiho (Nippon Decimal Classification, NDC) was born!
- 16 What’s bibliographic control? Revisited (9):
10th edition of Nihon jisshin bunruiho (Nippon Decimal Classification, NDC) has come!
- 19 Travel writing on world libraries: Europe
- 18 <Tidbits of information on NDL>
Turning over pages repeatedly makes them dirty.
- 27 <Books not commercially available>
Wainten Wine The Exhibition: Budō kara umareta kiseki
- 28 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

平成 29 年 6 月号 (No.674)

平成 29 年 6 月 1 日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 秋山勉

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
http://www.ndl.go.jp/

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 1 7 . 6

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

六

リサイクル適性[Ⓐ]
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。